

## 耳鼻咽喉科頭頸部外科

診療科名 科長名	耳鼻咽喉科頭頸部外科（文責者 小川 恭生） 小川 恭生
診療科概要	耳鼻咽喉科領域の医療、福祉に関する問題については、社会のニーズに対応し、耳鼻咽喉科研修医として、医の倫理に基づき診療を適切に実施し、境界領域の処理を正確に行い、学校保健や公衆衛生上の問題に対処できる基本的な能力を養う。 この研修目標は将来耳鼻咽喉科専門医のガイドラインに沿ってつくられており、専門医の修得を目標としている。 耳鼻咽喉科領域の外来患者診察を以下の諸点に留意して適切に実施する能力を養う。 必要な症候学の知識に精通し、適切な問診が取れる能力を有するとともに、患者心理を理解して問診する態度を身に付ける（患者の受け入れ、問診）。 外来で行いうる検査方法や検査機器を理解し、必要にして十分な検査を行いうる能力を持つ（診断、検査）。 問診、症状、所見による診断ならびに鑑別診断を行う能力を持つ（鑑別診断）。 疾患の内容、程度を把握し、適切な治療を行う能力を持つ（治療）。 必要な知識を理解し、他の医療従事者と協力して問題を解決する能力を養う（リハビリテーションなど）。 救急疾患、外来診療に伴う偶発症に対する診断能力、処理能力を身に付ける、救急能力を身に付ける（救急、偶発症）。
取得可能認定医専門医	日本耳鼻咽喉科学会専門医 日本頭頸部外科学会認定頭頸部がん専門医、 日本気管食道科学会専門医、日本がん治療認定医機構認定医
指定研修施設の名称	東京医科大学八王子医療センター
修養年限 プログラム	4年
1年次	1) 外来の受け入れ、文章の作成など ①疾患の程度、内容から、外来診療、入院診療および手術の適応を上級医の指示のもと定める事が出来る。 ②外来診療機器の取扱に精通する。 ③薬剤の適正な使用および取扱、処方箋を書く事が出来る。 ④診断書の作成ができる。 ⑤外来における院内感染の重要性を述べ、その対策が出来る。 ⑥紹介医に対する返答ができる。 2) 問診 ①主訴、現病歴に応じて適切な問診ができる。 ②それらに関連した家族歴、既往歴、生活歴、生活習慣を系統的に聞き記録できる。 ③問診の結果から疾患群の想定ができる。 ④鑑別に要する検査法の体系化ができる。 3) 診断ならびに検査 検査を指示し、自ら実施し、所見を上級医とともに判定評価することができる。 4) 鑑別診断 各症候に対し適切な鑑別診断ができる。 5) 治療 ①耳鼻咽喉科各疾患の適切な治療方針をたて、外来で可能な治療を行う。 ②患者の生活指導ができる。 ③患者、家族に対し医療上の教育ができる。 6) ハビリテーション及びリハビリテーション 上級医とともに医療としての方針を決定し、適切な助言ができる。 7) 救急・偶発症 外来で可能な救急処置ができ、診断に伴う偶発症に対処できる。
2年次	1) 主治医としての基本的能力 入院患者について次のことが適切に行える。 ①正確かつ詳細な問診を行い、記載する。 ②全身、局所の診断を行い、その所見を記載する。 ③必要な一般検査を選択し、また結果を判断できる。 ④同科あるいは他科の医師と立会いで診察（対診）する必要性を判断し、実行する。 ⑤必要な与薬、処置などの治療を行い、経過を観察し記載する。 ⑥上級医への報告、連絡、当直医への申し送り、退院時の外来あるいは関連医療機関への申し送りを正確に行う。 ⑦正確な入院病歴を完成し、問題点があれば考察を加える。 ⑧看護師その他の医療従事者との円滑な連携を保つ。 ⑨医療関係法規にのっとった適切な対応をする（診断書、死亡診断書、各種説明書、麻薬の取扱、伝染病についての対処、廃棄物の取扱など） ⑩院内感染の防止について配慮し、具体的に対応できる。 2) 全身管理 入院患者に対して、次の基本的な全身管理が適切に行える。 ①術前術後の全身管理と対応 術前：年齢、性別に関連する特異的事項、既往歴、生活歴、合併症などの病歴、疾患固有の特殊な状態、および術前検査の所見を総合して適切に対応する。 術後：術後の一般的対応ができる。 ②非手術例の全身管理と対応 悪性腫瘍の放射線治療および化学療法による合併症の管理、その他の疾患（重症感染症、自己免疫疾患、鼻出血、めまいなど）の管理 ③偶発症に対して迅速且つ的確な処置がとれる。 ④他科の疾患を合併する場合、その対応と関連科医師との適切な連携をとる。 ⑤ターミナルケアの経験をもち、下記のような項目について適切な対応ができる。 患者の不安と疼痛への配慮・患者の家族への配慮・死亡の確認 ⑥入院中の全身のなリハビリテーションに対し理解をもち、関連各科との関係をとる。 3) 専門領域の技術 ①手術の項目に設定された自ら術者となる手術について、患者の術前術後の管理が適切に行える。それ以上のレベルについては、指導医の監督のもとに管理ができる。 ②非手術患者については専門的治療を主体性を持って施行し、その効果につき正しく評価できる。 ③検査については必要に応じて適宜選択し、検査の項目に従って実施し、診断ならびに治療計画立案に役立てることができる。 ④疾患あるいは障害によっては、必要に応じてリハビリテーションについて指導あるいは助言が出来る。

3年次	<p>検査実施前に検査の意義、必要性、方法、検査に伴う苦痛、起こりうる問題、所要時間、検査前の注意事項などについて患者あるいは（および）家族に説明する。また検査結果について上級医とともに説明し、必要な指示、指導を行う。</p> <p>①耳鼻咽喉科の検査方法について原理と方法を説明し、適応を定めて自ら実施し、結果を判定評価して患者（被験者）のもつ問題解決のために利用する。</p> <p>②検査法について原理と方法を説明し、適応を定めて、標本の採取、検査の指示、依頼を行い、結果、報告を判定評価して患者のもつ問題解決のために利用する。</p>
4年次	<p>手術に関する一般的知識・技能を修得する。</p> <p>①疾患の種類と程度および患者の状態に応じて手術の適応と術式を判断し得る。</p> <p>②手術によって起こりうる偶発症について、あらかじめ説明しておく能力がある。</p> <p>③手術後に起こりうる合併症、続発症、機能障害についてあらかじめ説明しておく能力がある。</p> <p>④術中に起こりうる変化に対応できる。</p> <p>⑤麻酔ができる。</p> <p>⑥手術機器を正しく使用できる。</p> <p>⑦手術に必要な準備を指示できる。</p> <p>⑧手術介助者を指導し、協調して作業ができる。</p> <p>⑨術後の局所、全身の管理が出来、変化に対応し得る。</p> <p>⑩一般外科的手技に習熟する。</p> <p>⑪消毒、術中感染とその予防についての知識がある。</p> <p>⑫手術に関連した事項について、他科あるいは他医と協調して作業ができる。</p> <p>耳鼻咽喉科領域の基本的な手技ができる。</p> <p>①手術法の原理と術式を理解し、自ら実施できる。</p> <p>②手術法の原理と術式を理解し、手術の助手をつとめることができる。</p>
スタッフ紹介	<p>小川 恭生（教授）  近藤 貴仁（講師）  武田 淳雄（助教）  岩澤 敬（助教）  黄川田 乃威（助教）  羽生 健治（助教）</p>
週間スケジュール	
月曜日	午前 病棟 手術 午後 手術
火曜日	午前 手術 病棟 腫瘍カンファ 午後 病棟
水曜日	午前 症例検討会 外来 午後 外来
木曜日	午前 症例検討会 手術 回診 午後 手術
金曜日	午前 外来 手術 午後 手術
土曜日	午前 外来 病棟 手術 午後